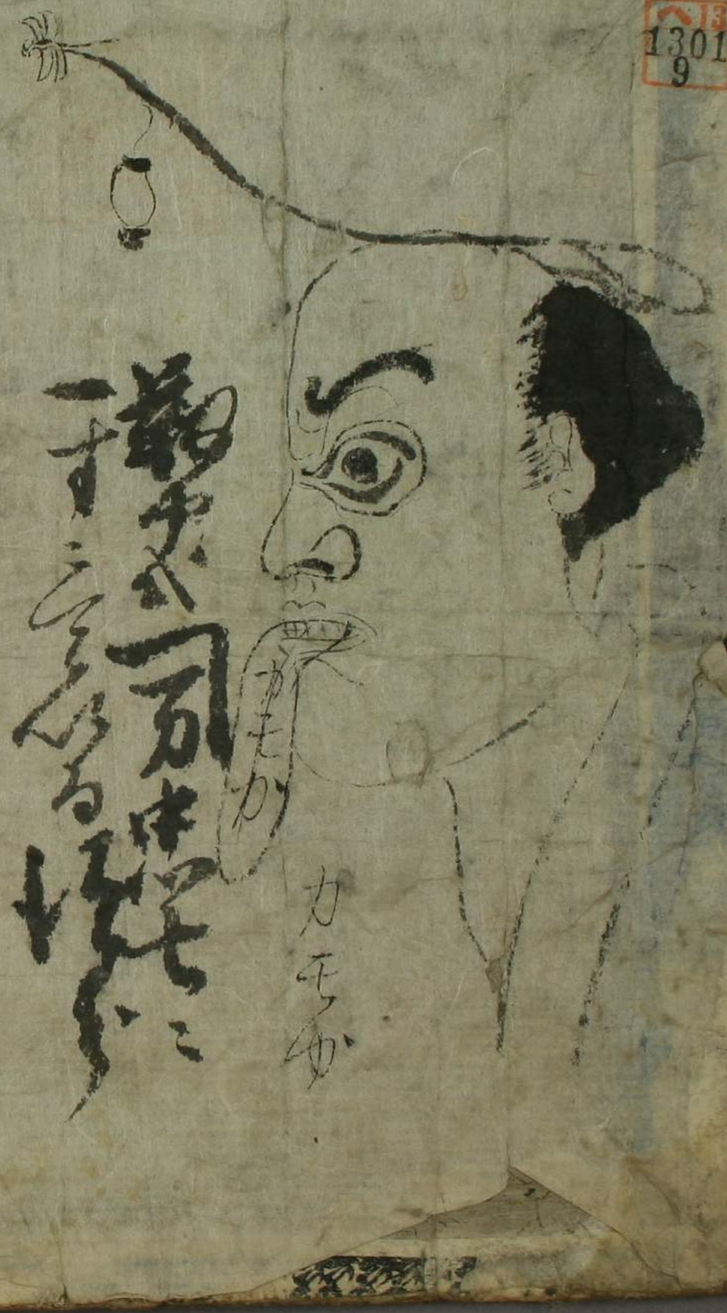
花五十三駅

後編

四

1301
=9

特
へ13
1301
9



吾妻下五十三駅後編巻之四

第十二駅

金谷宿の巻

○

なほ繁くあまたの大井川青園くまき川端へ名
せきまる赤星大八コウくあの家の前で越さ
れべるのぬぐ行と誠てくまたいつて川越すご合
点ござ候川いまく法度ござ候ゆへ此所で中人
づてをへ中とりふこ大八情ふ宮田儀とをまて
せび川越不審候ハヽ是ドヤアモシをへおざいのぜくへで

紙のこと一人おもひうおごんぐろうおご
つまるのお連のぶんもりせんほ」「十二連の分十二疋か
りるりのう「つまりそのいとそれをつてもおおの侍よそれ
もうとも年限三十二そぐ屋敷のこーさげ居申を「そ
とんよりうりの文句物こぐろうりこそれ」が「みアふりヤ
連じやアねへ「十二疋そぐ後へてぐあるりのう一ぬてこ来
いとそれをつてかりりうおおの侍よ
ひうまうつく居るさるりのと「ヤいと縛つてわうを見
てもえ大八ぐ目うへさつぱりうへねどもぞうと引こ深夜

の鳥「てなれへでも後ろをこのひつ呼ぬく時平
より又一人あの後ー後ー出ろせんほ侯ーけ女中
そんなうお出ろせんほ侯ーけ女中ぐかおの侍とそる
まるのぐいあぐこいひあるうう大こるまん毒であひ
おぐこ後ーやもうう「どみでもいくうぐもう「すく
おぐろるせんりぐうけ女中おおの郎のぐぐ青でそ
うろへ女中ぐろアとりみ円ぬくも川中へ毒ぬうう
お厭よ墨る毒侯ひうを脱ぬく川紙たち谷ぐの川へてみこ侍
ぬうくまこ「そりやアそ

せまいうの子こと女いアりヤアさんこらうそのさんこらの川澄いた年大うこと去ろうこらうよお大八「そうやアマアア丁やそのおうこう儀の大勢おどろくこと川辺のひくくもちごき周の夜よ内めく陰火這いて不思議とおりかこれふまいこれうあうく賜機が血ふまこれうあうさもの」げまるる妻きうこくこ「ろのこと丁やそのうとそ「居やうこう「やこうやさろうこのおり親い一あくこれて「オこ一あよ来いといやくさゆくどこぐ行ふとこれこと

そとそれんとすることたやうこうる大八刀抜こねこて狼多治澤の中へかくれこでこんたこべこそ幽魂の中をかこうあうこうと切れこで更ありよ縄へてさも服めこまる右ろうこそ白狼けうこる追の大八「うこ苦しやおそろしと時こく昨よおしも石止ぐ村宝の新川紙たもんづこあこくこうこ「オ、今点と向よの岩へ猿の女とこうこうの高へ高ぐさゆく」こ意へてはふ川端をくあゆやせ来く「サア女中家とこう立のの

吉後四ノ四

ふい[illegible]かせ給ふ寇を退治せし
事を尾[illegible]白それらの[illegible]
の為石田三郎[illegible]郎 短金の上使としてちう[illegible]へ
急つく駿河之介に結城切を継しは文蔵居[illegible]
積りあまりにも書持てめんりの乎「それはお案じ召
まするな絆し万事ぬかりぬ隼人めが付添ゆけば若
之助が立も[illegible]「イヤイヤそれも先刻より酒と和みて
其されば上使の時分は正体あるまじ新之丞が立て
あり被毒薬のきりて渡室然と承し合せて「いかが

それまでは総図は[illegible]と暗くおしも表の方上使のお入と
呼のをまずは出迎として奥の方より出る駿河之介
経も待ちせたる入来る結城七郎友光石田三郎為久は
人差別に座につき今日我くく上使として参る
依の義に[illegible]駿河之介時次[illegible]の坊ヨか
こり[illegible]里へ[illegible]宝を[illegible]丞[illegible]
護の役[illegible]
極くは楼居[illegible]
あらば速に[illegible]めさま時次といいきてハツと駿河之介

「そもお替めい分ろろく兄へおごろめの藁裏も後を
急り」い今く雨号こ云せも果だ石宮三郎殺あくけ
「だまろろまま殺河ろ女経験系とと仕そ亜ころれ
しいたれの云娘させめさめ考夜と用勤まて系就り
みそまな夜の分相添系座ひの一歩始終のろ尺系就で
冥てある支でもこ沢ろくろとと」ろろ宝と船
お分支ー妻とーて兄亜ろくが縁より修接到でよ
あろういめろろるろ殺の円を終系妖そふう「サタ支ハ
サアくくとと結の雨へまろ云ろけの系ろと三出る成

沢年人執めらまろる河橋娘兄元志どろさろあろさ
出上俊のおふろづくまろろ石宮ろ見ろろ橋「ア
辞どまの成沢年人上俊のおへ石孔玉船をろ居
みと白服分まび結城七希神とあ「イヤ先まれよ
ろ久夜辞どれとい云ろぐろ戈紹務ー成沢年人ヤ
冥ろの当ろとろを用ひ
そふ多つくる細をヤせ「ハ
殺河ろみ楼ち裏ち後の紋目高ろ」い今く
ての系「ろいやそ系へ殺河ろ外ようもヤろれ

どもおのおの計てゞ御さんぬるとき分文の白一ツ
ゝ銀いかとゞおぐる「ハヽ呂吸く分文投せ一ふをと
おぐゝぬけをとお結とおぐろてる人の初めてうる
さんるゞ我くたゝ妻ゝ活人の一方は成初時いる人い
御う吸ゝやゝゞ狂会股を吸ゝまるゝ雪て石目が日ふ
角立「ヤア結だの股分ゝゝて通会股をうゝむなく
砕ゝ行せーやゝ石面玉極とゝゝ分是べ結婚七弁御
宅ゝ「イヤそれまゝ細のあるうゝん宅ゞゞ
ゝ人ゝ衆寝ゝゝ分ゝ宅を分文投せーゝ呂仁兎の石

ゝを糸「フウリヤ行ゆへ「それべゝ人時矢初めの珈ゝゝそ
ゝる乳母あしゞ久ーく吉作ゝうざるようう梁が
主ホを弟ーホそくの病宇ゝまて縛ゝゝそるのくうう
ゝる化乳母が病中ゝ人参ゝ代ゝ吉張り一人の指ゝ遍
呂人売渡せーと宅ーホよゝうゝる君時矢みくゝうれを
宇ゝへの主系中将系を弟ゝて股時矢ゝゝ乳兄弟股乳母が姫あるは性ゝ
ゝて股交る性」へ兎仁兎の股を変ゝるゝ極くはゝ
ゝるゝ若お結ゝゝ付ゝゝ人い服をゝゝ狂会股を

の者をうち打擲又ワの
ひんこうくさく狂のみ稽さ
のよ狂紙お債へうま山寺稽古
まうるか児へみうび約束を
を者人という秋を約うび今日
此う君をも及せまて泊あるう
くみく又りやお約束みくれ
行とうとうとみうく泊へ者うまび兄さんよの智恵を
ざぶりまあぬうと問まうく年人を黙ると超ーとびも

うり」が「ビ狂」と及ざあ兄よい「コ」アノ此若君をオ、
サーコレ兄さんを切る此時若なりもお約束みくるつ
てもそまでもおおまるあの「オ、大きなのへそよ細作
つく宮さうコレ深酒このお君の人智よび「コ」テ此
おみい行人のオ、更てそ我書賠償が底はうまれと
飛れかくるもりんうと日日の生まをかいむ東
文義うや約若君とう智てう今文紙がやう青つ海れ
というがするそち若君此事約うん服約と此年人へて文
義びうそのさ小此そびくみ始やくみびはる

音後四十

まゐんる「そんなうけ若君の
の病ううせまし」その後松で
後室あへお目よりけ若万一の
おうれうの勢うまぬうの「ハア
おでやとあへまへ入こそうと
あるよ紙の方ひよ手死自雪の
そまうまりげぬ天神紙平八つとぐの
居のうびうう驚ひこみとうまぬのさんと何への
の一枝差角ふ入こくよ紙のおう垂驚ひこみ後で今日

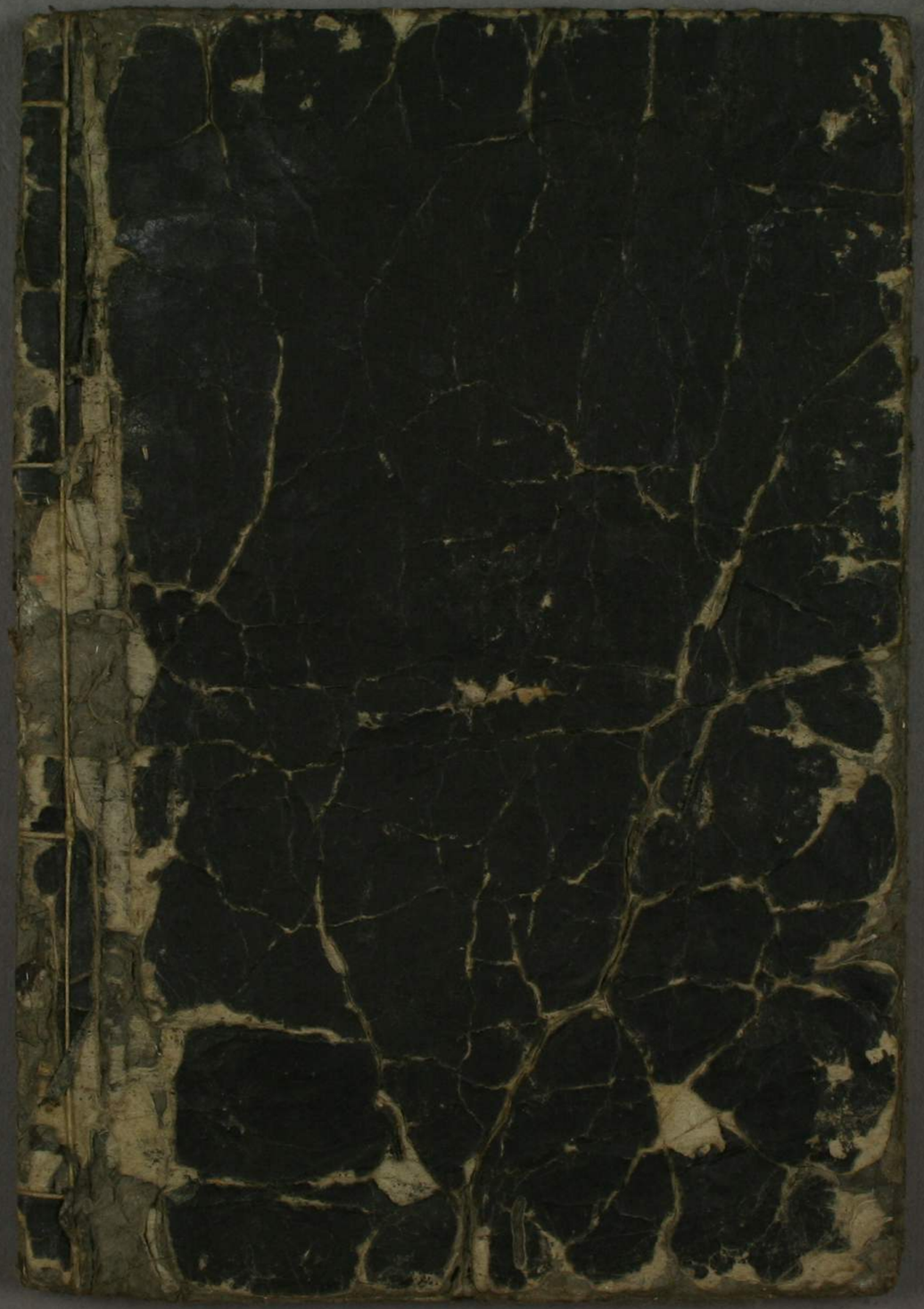
母人の口入とおりうふ剣こ
咲の一枝とまれば後室見ふ
入ぬそまうまいまこく咲こ
ふまこみ母よ驚ひこみとう
そこうへの南吉そうけ梅
咲をゆへけやうよ年老こか
めとけ差よたこへふよ死
さこけよ咲ふへいふ胖うと
めう不孝ふ胖と折指と被

より飛出る年人深傷を若者を抱きあげるふ中乃
介入先くお招ぜまねと押潰つまべく跳の方向
と小兎小日の如りまびり足られて居ら「ガラ兎
が「ウそこの板ふめどら」時若者そのうろ和の者
の挨拶あら引筈あるめ不
秘蔵のあうひあくべる引外まどそふ秘めくあふ
アノ老つきドレくこうふ抱してうまと強み笑顔
さうんの体「ウ」味若君抱を浚宝ふへとい浚しな
めでくと浚一筈ると見で呼りあごで言ふ抱方

も泊新足せぬ深傷が時若浚せべ咬ぶ浚宝「テモよん
肉れと飯急あくふと泊出をよ浚泊抱ふべる跳
うん俄ふうと泊出をよ浚泊抱ふべる跳
の方ふと申うみ丁寧ら「い叶若を足くうふ居まび
雪の動を見うう処ふ垣あう多着いうふうそぐ
てくらせん浚抱をてうう処ふ垣あう多着いうふうそぐ
兎れぐと作ふうと浚泊の作ふうと
母人の泊抱姫乗うふいりレ用之の招新若よい「ハ」と
若へて一方うた門よみぐ抱る浚宝前後のうぶえ

を後室のまへに押直せば蓋をあくまゆをひそめ忽
の内乃至五六人と不審の体ふと着を脱け「破ぬ」
毒味せいハツと云へて立ちを集人まづ〳〵と押止め
毒味い給仕の者の役たゞしくみな仕舞うまいと自ら
立て箸を下げ蓋をあくやと見同じく不審の眉を
皺め物ある容躰をしてかざせばそれと「破」
緒〆の冊数の奇特叔母後人の功ことと思ひどそれと知
らぬ風「方門」ゟ毒味せいと毒と知りつゝ己が子ゟ
実父ゟの内たつた今までどのくまぬ

給仕の役ハツと云へて立ちを一口喰とそれふ七顆
八例血を吐く苦痛み悶えるを見るより集人へ
刀引めさ着をそろしくお房せば是ハと驚く刑部
軍八人くも「コリや集人何で幹が着物くさん幹
方門ゟ給仕の役を勤めるゟ毒物の箸紙の味を案ずるより
形を能を乱せ」仕置といふ重き罪人ぞあるを
その着物のであるゟ集人是ハ破ぬ
六ふそよ方ゟ知る訳

居へ出来ぬドリやうまで
らあ老の一徹おくりの人と白眼まで」徐く
兒取もおくお互ぞふと味
中の大ゼ弁天ひやうたんつぐ刑部屋八兵
中の人もそまぐに己ぐれ入ぬ後ぬく入年人
う浪を宗浮鴻をざけて「ハテんの数毋のありそな日暮
おそく船り」お業いろもの不審のはめるまひりや通
治右あひ」実猫の処を弁慶ひーう「ぐ」のあそうの
悔実といひ急と角乃中いよ舩の方乃形らそうハ

とうなと号業よくうくうう浪二人年人名ちう村助成
おうあうに指ざさまませ方役があるうハワといひな
名ろうの色ー耳ふりようせ呼がフういうな助計それ
ようんとう浪ひをくふ一会を粧ま工夫を懲しる